

森まゆみ著「東^{とうきょう}京^{あんない}ひがし案内」ちくま文庫、筑摩書房 2010 年 4 月 10 日朝刊を読む

神保町一本とカレーと中華料理―

1. 子どものころから隣町神田が好きだった。家の近くを荒川土手から東京駅北口行の都バスが通っていたからで、本郷を経由して御茶ノ水駅前、駿河台下へとよく行った。
2. 最初にいりびたったのはもちろん坂下の三省堂で、私はお小遣い^たを貯めてはここでありとあらゆる学ぶおもちゃを買った。ワークブックにステンドグラスに家の模型に雲形定規に顕微鏡まで……。
3. 中学になると坂の途中の YWCA のプールに通い、ロザリオを集めたり、楽器屋で楽譜を、古本屋で文庫本を買ったりもした。西洋音楽とかキリスト教というものに触れたのは駿河台から坂下につづく町。この十年、わが住む三田線白山から3つめが神保町、行くのがおっくうでない町である。古書街神保町は私にとっての巨大な書庫のようなものであるし。
4. 神保町付近で目立つのは、何といってもカレー屋と中華料理が多いこと。激戦区もいいとこだ。古書センターの二階のボンディ(洋風カレー)と共栄堂のスマトラカレーを二大巨頭とすれば、岩波ホール裏のマングラ、小川町のトプカ、エチオピアが新興御三家か。ジョティーや元祖櫓の昼のカレーも人気だ。
5. なんでカレーが流行^はるのか^やかというと、左手で買ったばかりの本を読みながら右手で食べられるファストフードであるという説がある。また出版、書籍の町の人びとは食事時間が不規則で、カレーならご飯さえ炊いておけば、即座に出せるともいう。2 日、3 日煮込みましたと保ちのよいメニューでもある。四半世紀昔、石津謙介の VAN というブランドが一世を風靡したころ「VAN カレー」なる店に長蛇の列ができたと聞くが、その店は覚えていない。
6. 中華料理の方は、揚子江菜館、桃園、漢陽楼、新世界菜館、同系列のかん咸亨酒店から餃子のスキートポーズや三幸園、北京亭まで多い。ぶっきらぼうなおばちゃんのいる源興号もおおいかったが店じまい。これはその昔、神田辺に東亜高等予備校があつて、日本の高等師範や大学をめざす中国人がここに学び、この近くに下宿^{むな}していたかららしい。たとえば中華人民共和国の首相となった周恩来が一高や高師の試験に落ちて空しく帰国することになる 19 歳の頃、通ったのはいま駿河台下にある漢陽楼だった。ここのセロリそばや夏のひすい冷めんはおいしい。周恩来さんのいた頃は中国映画でよく見るようなぶっかけめし屋だったらしいが。そのほか、ろしあ亭、メナムのほとり、ムイトボンなど、エスニック料理も多くて奥が深い。
7. 神保町といえば靖国通りの一つ南側にあるさくら通り、すずらん通りもいこごちがいい。文房堂の古いビル、東京堂書店の品ぞろえのよさ、内山書店で上海や北京の本を買い、書庫アクセスがあった頃は日本の地方の本を買った。外ばかり歩いて目がまぶしくなると私は薄暗い「さぼうる」でさぼっていちごジュースをのむ。

8. 神田は庶民の暮らす町でもあった。納豆の行商をしながら世話好きで区議となった町人^{まちびと}のことを「神田を歩く」という本に書いたら、司町の居酒屋みすやのご主人から「あれは唐辛子の行商だったと思います。大辛、中辛なんて言って売り歩いてましたから」とさっそく電話をいただいた。人のおいがなつかしい町である。

[コメント]

私の大好きなエッセイストで、雑誌「千駄木」の編集者 森まゆみさんの「東京ひがし案内」。本書を片手に、東京の散策をしたり昔行ったことのある街に思いをはせたりするのも興味深い。また、樋口一葉が住み移った街を訪れながら、一葉の作品を読み返すことは更に興味深い。是非、御一読を。

— 2014 年 10 月 10 日 林 明夫記 —